

刊行境内図の資料的価値と問題点

——近世京都の寺社を事例に——

小林 善 仁

一・はじめに

本稿の目的は、近世に寺院や神社の許可を得るなどして市中の版元から刊行された寺社の境内図（以下、刊行境内図）について、既往研究における資料的位置づけを確認した上で、刊行境内図が有する資料的な可能性を刻記や記載内容を通して検討することである。これまで近世・近代の手書きの寺社境内図を資料として境内地の復原的考察を進めてきた筆者にとって、刊行境内図はその景観的描写を通して筆彩絵図では知り得ない寺社境内地の具体的状況を把握するための資料となり得ると考えているためである。

近世後期の日本では、伊勢参宮に代表される寺社参詣が盛んに行われ、寺社や名所旧跡、景勝地や土地の名物・名産などを記した名所図会や名所案内記が江戸・京都・大坂の三都

や地方都市などで数多く刊行されていた。寺社に関する出版物は冊子ばかりではなく、略縁起や境内の地図類も寺社やその門前などで数多く刊行されており、これらの多くは木版・単色一枚刷りで、大量に出版することが可能なものであった。名所図会などの冊子を現代の観光ガイドブックに例えるならば、境内地図類は簡便なガイドマップやリーフレットに相当すると言えよう。

名所図会や名所案内記といった冊子型の刊行物は歴史地理学のみならず、日本史学・建築史学など幾つかの分野でそれぞれの目的に応じて利用され、研究の蓄積が進んでいる。しかし、寺社関係の絵図になると事情が異なる。これまで研究の蓄積が進んできたのは手書き彩色の絵図であり、名所図会や名所案内記の掲載図、刊行絵図を資料として用いていてもほとんど補助的な役割を与えられてきたにすぎない。歴史地

理学や日本史学の分野で刊行境内図の分析あるいは刊行境内図を資料とした研究は管見の限りほとんど存在せず、白石克による「江之島絵図」の研究^②の他は、慶應義塾図書館による資料集の刊行や師橋辰夫による個別図の解説^④が見られる程度である。

刊行境内図が研究資料としてあまり使われてこなかった理由は幾つか考えられるが、以下では二点を示しておこう。その一つは、刊行境内図が絵図（地図）の一種とみなされることがほとんどなかったことである。例えば、寺社境内地を鳥瞰的に描いた刊行図を集めて禿氏祐祥が編集したものに『京都社寺境内版画集』^⑤がある。そこには近世の木版墨刷りの境内図と近代の銅板印刷物も含まれているが、禿氏は地図集あるいは絵図集ではなく、版画集と呼んでいる。また、歴史地理学者の矢守一彦は「広域を写した俯瞰図が、地物の空間的配置を示す機能」をもち、地図的な役割を果たすことを認め^⑥てはいるものの、刊行境内図については全く言及していない^⑥。刊行境内図の描写範囲は矢守の言う「広域」に比べれば遙かに狭小であり、矢守は刊行境内図を地図的な機能をもつ俯瞰図あるいは鳥瞰図とは考えていなかったと思われる。二つ目は、刊行境内図が大量に出版されかつ安価で入手できたために旅が終わると忘れられたか廃棄されたとみられ、個人が収

集している場合でもなければ、ほとんど手元に残ることはなかったと考えられることである。刊行境内図が比較的安価な大量印刷可能な出版物であったことがこうした状況を招いたと言えよう。

矢守のように刊行境内図を地図とはみなさない研究者がいるとしても、刊行境内図が筆彩の寺社境内図に欠けた情報を補う資料になる可能性をもつ限り、寺社境内地を研究対象とする筆者はそれを軽視できない。そこで、以下では寺社に係する絵図の分類とそのなかにおける刊行境内図の位置づけを確認した上で、近世の日本における江戸・大坂・奈良・伊勢などと並んで寺社への参詣が盛んに行われていた京都の刊行境内図を慶應義塾図書館が刊行した資料集の『江戸時代の寺社境内絵図』^⑧、京都府立総合資料館所蔵の『池田遙邨氏旧蔵京都関係絵図類』^⑨の中から抽出し、刻記と記載内容の検討を通して、刊行境内図の資料的価値について考察を進めていく。

二．寺社関係絵図の分類と刊行境内図

寺社に関わって作成された絵図は、中世・近世を中心に目的や用途に応じて多様で、その数も多い。中世の絵図は境内図を含めて手書きの彩色絵図であるが、近世になって出版技

術が発達するとそれに加えて多数の刊行境内図が作成されている。極めて簡易な分け方ではあるが、作成時期と作成方法によってこれらの絵図を分けると、①中世に作成された手書き絵図、②近世に作成された手書き絵図、③近世に作成された刊行絵図の3種類になる。

さらに、絵図の作成目的あるいは用途という点から、幾つかの分類案が提示されている。例えば、景山春樹は寺社を対象とした絵図を信仰絵図・経済絵図・建築絵図の三つに分類し、その上で寺社の絵図は大半が信仰絵図であると述べている¹⁰。景山が言う信仰絵図とは「信仰の場であり、信仰の対象である神社や寺院の建築など、宗教的施設を中心を据えて、ひろくその境内地の景観などを描いているもの」¹¹であり、信仰絵図を寺院・神社の境内絵図、曼荼羅絵図、参詣・参宮曼荼羅絵図に細分類している。また、下坂守は信仰絵図の描写の対象が寺院や神社の境内であることから信仰絵図を「社寺絵図」と捉え直し、絵図の作成目的に着目して社寺曼荼羅絵図、社寺参詣曼荼羅絵図、社寺境内絵図、社寺勝示絵図、社寺建築指図の五つの細分類を提示した¹²。これらに対して、古地図研究家の山下和正は絵図の分類方法の試案を提示するなかで特定の主題のもとで作成される主題図の一つとして道中図・参詣行楽案内図・その他の主題図という三カテゴリーを

設け、「参詣行楽案内図」の下位に山岳図・名所図・温泉図と並べて「社寺図」¹³というサブカテゴリーを設けている。「社寺図」のカテゴリーには手書き彩色の「山王権現比叡山三塔図」や「三縁山増上寺絵図」などと同時に、「日光山の御絵図」や「伊勢参詣案内図」などの木版刷りの刊行図も同一の「社寺図」として分類されている¹⁴。

景山・下坂の分類には、ともに境内絵図というサブカテゴリーが設けられている。しかし、曼荼羅図や勝示絵図に比べてそれが指し示す内容は曖昧であり、さらに主に中世の寺社を対象とした手書き絵図（先述①）を念頭に発案されたものであることを考慮に加えれば、近世の刊行境内図をそこに位置づけることは困難である。また、山下の分類案は近世絵図を中心に考えられたもので、明確に刊行境内図を含む分類案であった点は評価できる。しかし、山下の分類では手書き絵図と刊行図の区別は重要な指標とはなっていないため、両者が同一カテゴリーに混在するといった事態が生じている。これらに対して酒井一光は、一枚刷りの社寺境内図を境内の名所案内として描かれた図と捉え直し「社名所図」¹⁵という新たなカテゴリーを設けている。しかし、これは下坂の言う「社寺絵図」の五つのサブカテゴリーに新たなサブカテゴリーを加えた便宜的なものではない。

そもそも刊行絵図は、手書き絵図に対して作成方法や作成主体だけでなく、伝達される情報の内容や表現、さらには情報の利用者が大きく異なっている。こうした違いを十分に考慮しないままの分類がどれほど有意義なものか、少なくとも近世絵図の分類においては甚だ疑問である。刊行図であるがゆえの特色を踏まえつつ、絵図分類の中に刊行境内図の位置を定めることが難しいのは、中世・近世を問わず、手書き絵図の分析を中心にして進んできたこれまでの絵図研究のあり方を反映しものであるが、今新たな分類を試みる余裕はない。また、筆者の当面の関心は寺社の境内地である。手書き絵図との対応を考慮しつつ、刊行絵図の分類を試みる作業については、今後の課題としておく。

三・刊行境内図の資料的検討

(一) 分析対象の資料

『江戸時代の寺社境内絵図』¹⁶は慶應義塾図書館が刊行境内図を集めて刊行した資料集である。これに先行して刊行された同館が所蔵する寺社の由来を記した略縁起の解説書と併読することで、当時の寺社観光ガイドの様子を知ることができる。この資料集は関西に始まり、東海・関東・東北とその他の地域、補遺編の三巻で構成されており、このうち近世京都

の寺社を対象とした刊行境内図は年代の不明なものを含めて二〇点が収録されている(表1)。但し、それらの刊行境内図が慶應義塾図書館に所蔵された経緯は不明である。

もう一方の京都府立総合資料館に所蔵される刊行境内図は、『池田遙邨氏旧蔵京都関係絵図類』¹⁹に含まれている。池田遙邨は大正・昭和期に活動した日本画家であり、池田が個人的に収集したものが寄贈されて資料群化したものである。池田は、歌川広重や種田山頭火の作品に傾倒して自然と旅を愛した画家として知られ、東海道五十三次をはじめ全国各地を旅して回っている²⁰。収集された刊行境内図は、これらの旅のなかで集められたものとみられる。

『池田遙邨氏旧蔵京都関係絵図類』の絵図類は全部で五〇枚である。内訳は寺院絵図が一八枚、神社絵図が九枚、宇治・嵐山・天橋立などの名所絵図が一二枚、京都図などの都市図が五枚、瓦版・宝絵などその他に分類されるものが六枚である。このうち、刊行境内図は寺院絵図・神社絵図を合わせた二七枚であり、表2にその一覧を示した(表2)。寺社境内地については、慶応四(一八六八)年の神仏分離や明治四(一八七一)年の社寺領上知(上地)とその後の境内地処分などによって境内地の景観が大きく変化した²¹が、明治四年以降の刊行年をもつ絵図が五点(池田No.6・18・19・22・

表1 慶應大学附属図書館所蔵刊行境内図一覧（近世京都関係分）

No.	図名	寺社名	刊行年		刊記など
			和暦	西暦	
1	愛宕山略図	愛宕社	—	—	「東南寫」
2	城州八幡山案内絵図	石清水八幡宮	—	—	「男山麓 長浜家蔵版」
3	城州鹿鷲山笠置寺絵図	笠置寺	—	—	×
4	音羽山清水寺略図	清水寺	弘化4	1847	「弘化四年刻」「洛土井上春曙画(印)版元山本五郎兵衛」
5	北山鹿苑寺金閣之図	鹿苑寺	—	—	「谷華明」
6	北山鹿苑寺金閣図		—	—	×
7	山城国宇治興聖宝林禅寺之図	興聖寺	—	—	「東肥藩 一鳳森敬之寫」
8	鷲峯山高台寺之勝景	高台寺	—	—	「井上治兵衛刀」
9	洛陽正東山那智若王子社地全図	若王子社	弘化4	1847	「弘化丁未孟春寫真景 近江介原在照」「井上治兵衛刀」
10	東福禅寺伽藍之図	東福寺	寛政13	1801	「古板磨滅 再版寛政十三辛酉年改」「画師高宮永寿八十一歳書」
11	山城国葛野郡松尾御社略図	松尾社	—	—	×
12	宇治黄檗山絵図	万福寺	—	—	「宇治黄檗門前 大田太兵衛板」
13	皇都吉田御社絵図	吉田社	—	—	「吉田殿御冠烏帽子司 西村儀兵衛」
14	北野天満宮御境内図	北野天満宮	—	—	「速水春曉斎遺図」「森川保之補図」「御墨筆硯所 三宅清兵衛蔵版」「製本所書林 野田儀兵衛発行」「京師 岡田茂兵衛刀」
15	銀閣寺林泉図	慈照寺	慶応4	1868	「慶應戊辰仲夏寫 梅嶺幸直豊」「京都 倉貫刀」
16	洛東歌中山清閑寺絵図	清閑寺	—	—	「阿州湯淺氏李達謹画」
17	東山大仏殿之図	方広寺	天保3	1832	「天保三辰三月再刻」「花洛中村有楽斎書図」「大仏御殿御印」「弘所瑞錦堂」「板元文染堂」
18	東本願寺御堂絵図	東本願寺	寛政10	1798	「寛政十年戊午春再板御免」「書林 御寺内 海運堂新版」。
19	鞍馬図	鞍馬寺	—	—	×
20	勅会御開扉御行粧略図	因幡堂平等寺	嘉永元	1848	「玉園源成和謹寫」「因幡堂蔵板」

—…刊行年不明 ×…刊記無し

注) 本表は次の文献より作成した。白石克(1990)『慶應義塾図書館所蔵 江戸時代の寺社境内絵図(一枚刷)』上・関西, 慶應義塾大学三田情報センター。同(1997)『慶應義塾図書館所蔵 江戸時代の寺社境内絵図(一枚刷)』補遺編, 慶應義塾大学三田情報センター。

表2 『池田遙邨氏旧蔵京都関係絵図類』 刊行境内図一覽

No.	図名	寺社名	刊行年		刊記など
			和暦	西暦	
1	塩月山医王院水薬師寺御縁起	医王院	—	—	「京都府山城国葛野郡七条村字塩小路」
2	音羽山清水寺略図	清水寺	明治2	1869	×
3	音羽山清水寺略図		弘化4	1847	「弘化四年刻」「洛士井上春曙画(印)版元山本五郎兵衛」
4	北山鹿苑寺金閣寺	鹿苑寺	—	—	「梅川東举画」
5	北山鹿苑寺金閣寺之図		—	—	「谷華明」
6	京都北山金閣寺全図		明治28	1895	×
7	銀閣寺林泉図	慈照寺	慶応4	1868	「慶應戊辰仲夏寫 梅嶺幸直豊」「京都 倉貫刀」
8	洛西粟生光明寺山内細図	光明寺	—	—	×
9	黒谷金戒光明寺全図	金戒光明寺	—	—	「笹土 春翠四方源酒寫」
10	醍醐山絵図	醍醐寺	—	—	「長陽作」
11	華頂山大谷寺知恩教院全図	知恩院	—	—	「藏人所衆正六位下式部省大録菅原朝臣為恭寫之」 「調進所 田村文嶺堂」 「版木師 加藤佐助 刀 安之助」
12	皇都五山之一惠日山東福禪寺全図	東福寺	—	—	×
13	東福禪寺		—	—	×
14	丹後国成相寺山景	成相寺	—	—	×
15	丹後国成相寺山景		—	—	×
16	京大仏殿方廣寺三十三間堂新日吉社等御境内	方広寺 他	—	—	×
17	宇治黄檗山絵図	万福寺	—	—	「宇治黄檗門前 大田太兵衛板」
18	黄檗宗大本山万福禪寺		明治27	1894	×
19	愛宕神社之全図	愛宕神社	明治17	1884	×
20	愛宕山之図	愛宕社	—	—	「高倉在孝寫図」
21	愛宕山略図		—	—	「東南寫」
22	京都府船井郡園部生身天満宮	生身天満宮	明治35	1902	×
23	石清水八幡宮行幸行列図	石清水八幡宮	—	—	×
24	山城国綴喜郡男山八幡宮全山図	男山八幡宮	明治11	1878	×
25	山城国愛宕郡官幣大社賀茂別雷神社之全図	上賀茂神社	—	—	×
26	洛陽北野ノ社細図	北野神社	—	—	×
27	西之京安楽寺子規天満宮御境内附四方通抜近道之図	子規天満宮	嘉永5	1852	「四季ノ席貸 郭公茶亭」

—…刊行年不明 ×…刊記無し

注) 『池田遙邨氏旧蔵京都関係絵図類』(京都府立総合資料館所蔵)より筆者作成。

24)、「京都府」(同No.1)や「官幣大社」(同No.25)のように近代に刊行されたことが明らかでない絵図が二点ある。また、「石清水八幡宮行幸行列図」(同No.23)は、文久三(一八六三)年四月の孝明天皇による石清水八幡宮への行幸の様子を描いた絵図であり、描写の中心は行幸の行列にあるため境内地を対象とした図ではない。加えて、池田No.14・15の「丹後国成相寺山景」⁽²²⁾は図題の通り丹後国の成相寺を描いたものである。以上の結果、二七枚の刊行境内図のうち、近代に刊行された七点と行幸行列図一点、それに対象範囲外の寺社境内地を描いた絵図二点⁽²³⁾の計一〇点を除いた一七点が『池田遙邨氏旧蔵京都関係絵図類』に含まれる分析対象の刊行境内図である。

(2) 刊行境内図の刻記

刊行境内図には、全てではないが刻記が記載されている。絵師、彫師(刀工)、版元、刊行年、作画年などの情報がそれぞれある。これらの全てが揃うことは稀であるが、刊行年や作画年を知ることが境内図出版の背景や描かれた寺社の景観年代を理解するためには欠かせない。

① 絵師・彫師・版元

近世の絵師⁽²⁴⁾は朝廷や諸大名の御用を務めた御用絵師と一般

の町絵師に分類され、このうち御用絵師は宮中御用の土佐派と將軍家・大名家の御用を務めた狩野派がよく知られている。

分析対象の刊行境内図の中で御用絵師であることが確認されたのは三人とその数は少ない。一人は宮中御用の原派三代目原在照(慶應No.9)であり、次に大坂で活動した円山派の町絵師で肥後細川家の御用絵師を務めた森一鳳(慶應No.7)、そして町絵師から蔵人所衆岡田家の養嗣子になった冷泉為恭(池田No.11)も御用絵師に含めることができよう。こうしたことから、刊行境内図の作画の大半は町絵師の手によるものであったと考えられる。町絵師の中でもとりわけ京都円山派の絵師が多く、なかには梅川東南(慶應No.1・池田No.21)と東拳(東居、池田No.4)のように師弟で刊行境内図に携わる絵師もあった。東南は御幸町通四条下ルに居住し、他に嵯峨の清凉寺の刊行境内図の絵を担当している。また弟子の東拳⁽²⁵⁾は、川部玉園(慶應No.20)・四方春翠(池田No.9)、歌川北水・歌川国員と共同して幕末期に『都百景』⁽²⁶⁾を作成している。彫師は、図中では「刀工」や「版木師」なども記される。彫師を記す刊行境内図の数は絵師に比べてさらに少なく、重複するものを除いて五例を数えるのみである。このうち、高台寺と若王子社の図に携わった井上治兵衛(慶應No.8・9)は著名な彫師で、室町通下立売北に居住したことが文化一三

(一八三〇)年版『平安人物志』⁽²⁹⁾に記されている。

刊行境内図の版元は図中では「板元」や「書林」などとも記される。確認された例をみると万福寺の「宇治黄檗門前大田太兵衛板」(慶應No.12・池田No.17)、北野天満宮の「京都北野西今小路町 御墨筆硯所 三宅清兵衛藏版」(慶應No.14)、東本願寺の「書林 御寺内 海運堂新版」(慶應No.18)、それに清水寺の「板元 山本五郎兵衛」(慶應No.4・池田No.3)のように寺社の門前や寺内町などに住む版元が少なくなかったことがわかる。このうち、三宅清兵衛は屋号が「文玉堂」であり、北野天満宮の許可を得て参詣者向けに名物の梅干しを宣伝する引札を発行している⁽³⁰⁾。また、山本五郎兵衛の屋号は「丸屋」と言い、清水門前二丁目に店を構える版元で、書中に天保一〇(一八三九)年の記載をもつ「音羽山清水寺縁起并堂塔社祠細記」を刊行している⁽³¹⁾。いずれも、対象となる寺社と版元との結び付きが窺える事例である。しかし、「文染堂」(慶應No.17)や「海運堂」(慶應No.18)など屋号のみの場合もあり、また記載のないものも多いという事情から版元名を手掛かりに刊行境内図の出版状況を探ることは難しい。

②刊行年・作画年・景観年代

表1・表2でみる限り決して多いとは言えないが、刊行境内図の中には刊行年や作画年を記したものがあ

る。「弘化四年刻」(慶應No.4・池田No.3)、「古板磨滅 再版寛政十三辛酉年改」(慶應No.10)、「天保三辰三月再刻」(慶應No.17)や「寛政十年戊午春再板御免」(慶應No.18)であり、作画年は「弘化丁未孟春寫真景 近江介原在照」(慶應No.9)、「画師高宮永寿八十一歳書」(慶應No.10)、「慶應戊辰仲夏寫 梅嶺幸直豊」(慶應No.15・池田No.7)である。これらの刊行年の記載には刻・再刻・再版(再板)の区別がある。刻は、刊行年が明記されていれば、その年の刊行と考えてよい。しかし、再刻・再版(再板)は刊行年と作画年が異なっていることを示しており、再刻・再版(再板)に際して情報が改められた可能性もあるため刊行年の境内の状況を描いたものかどうか別に検討する必要がある。

例えば、「東山大仏殿之図」(慶應No.17、図1)には、「天保三辰三月再刻」の記載があり、「大仏御殿御印」の押印がある。ここからこの図は方広寺の許可を得て再刻・刊行されたことがわかる。また、「花洛 中村有楽斎書図」・「弘所瑞錦堂」・「板元文染堂」の刻記から、絵師は京都の中村有楽斎、版元は文染堂、弘所(売弘所)は瑞錦堂であったことがわかる。瑞錦堂は三条通寺町に店を構えていること⁽³²⁾から境内地以外でも販売されていたと推察される。

方広寺の境内を見ると、大仏殿・仁王門・三十三間堂、そ

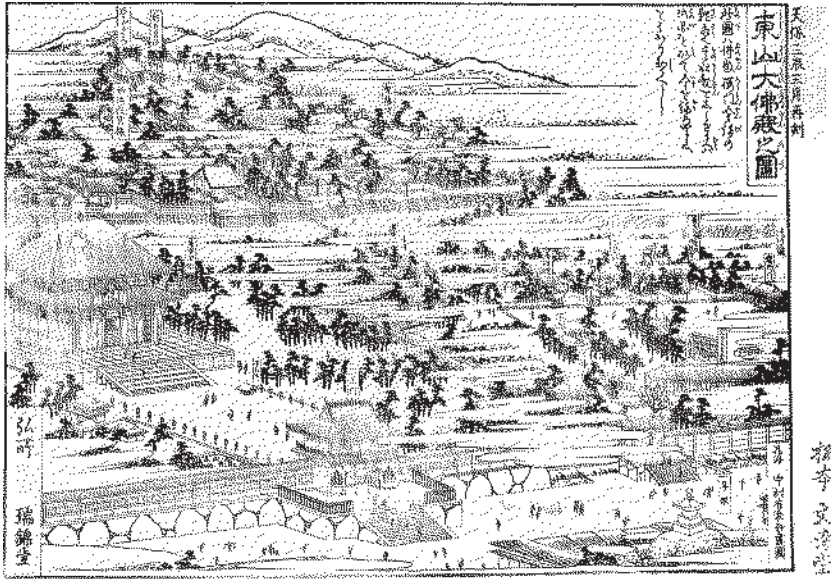


図1 「東山大仏殿之図」 ※『江戸時代の寺社境内絵図』補遺編 所収。

れに方広寺住職を兼務した妙法院などが描かれている。しかし、方広寺大仏殿と仁王門は寛政一〇（一七九八）年の雷火で焼失している。焼失した像に代わって木造半身大仏が完成するのは「東山大仏殿之図」の刊行から四年後の天保一四（一八四三）年のことである。つまり、「東山大仏殿之図」刊行の年には大仏殿は存在しておらず、図の内容と実態とが一致していないのである。この点に関連して、刻記には「此図ハ仏殿樓門全備の体相也。其壯觀を志らざる人ハ此図を以て今を眺め、いにしへをはかり知るべし」という記述がある。これによれば、大仏殿や仁王門の焼け跡を前にして本図を眺めることによって実際には失われて見ることのできない往時の大仏殿や仁王門の景観を知らせることが再刻・刊行の目的になっていたものであり、天保三（一八三二）年の実際の景観を伝えようとしたものではない³⁴。こうした点は、同時代性や正確性とは異なる点に重きを置いた刊行境内図があることを示している。

刊行年や作画年の刻記が無いなかで、刊行境内図の景観年代あるいは作画時期を知る手掛かりは二つである。その一つは絵師の活動時期から推定するもので、もう一つは描かれている境内地の景観から推定する方法である。前者の事例として、冷泉為恭が作画した知恩院の刊行境内図（池田No.11）を

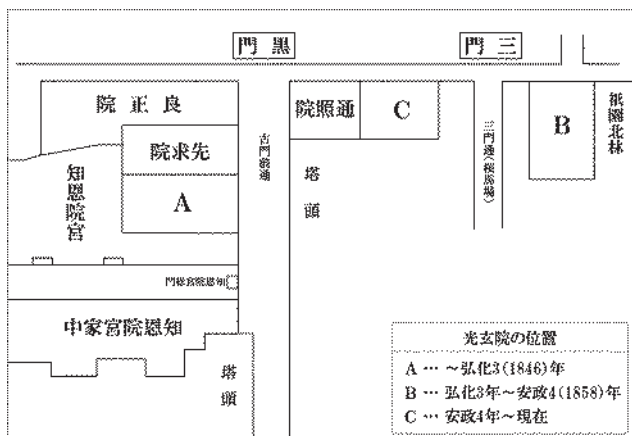


図2 知恩院境内地における光玄院寺地の変遷

※『知恩院史』掲載図をもとに筆者作成。

検討してみよう。図の左上隅に記載された「勅修絵詞傳新寫筆者 藏人所衆正六位下式部省大録 菅原朝臣為恭寫之」のうち、「勅修絵詞傳新寫筆者」とは為恭が知恩院の『法然上人行状絵図』（勅修御伝・48巻）の模写⁽³⁵⁾を行い、既に終了していたことを示している。模写が終わったのは嘉永六（一八

五三）年である。また、「正六位下式部省大録」と自らの官位・官職を記載しているが、為恭は嘉永三（一八五〇）年六月に正六位下式部大録に任じられ、安政二（一八五五）年一月に式部少丞に転じている⁽³⁶⁾。したがって、知恩院の刊行境内図は嘉永六年から安政二年一月までの作画となる。

知恩院の塔頭群は黒門と表門を結ぶ道路（現、華頂道）の両側に薨を連ねて描かれているが、この状況は現在の景観とは大きく異なっており、現在は三門と新門（図中の山門と大門）間の知恩院道（桜馬場）の北にも塔頭が並んでいる。知恩院では、幕末期から近代・現代へと時代が推移するなかで塔頭の数と位置に変化が生じたと推察されるが、冷泉為恭の作画した幕末期に絞って塔頭の異動をみると、現在は知恩院三門前・北側に位置する光玄院がこの時期に黒門・表門間の道路北側（先求院西隣）から山門前桜馬場南側へ移り、その後暫くして現在の寺地へと再度移転した⁽³⁷⁾。このうち最初の移転地に光玄院が移ったのは弘化三（一八四六）年五月であり、隣接する知恩院宮の「御境内御狭小」による宮御殿の増地に伴うものであった（図2）。図中の光玄院はこの位置に描かれている。光玄院は再び寺地を移転する安政四（一八五八）年までの一二年間この地（図2・B）に所在しており、推定した作画年の嘉永六年はこの一二年の間に入る⁽³⁸⁾。

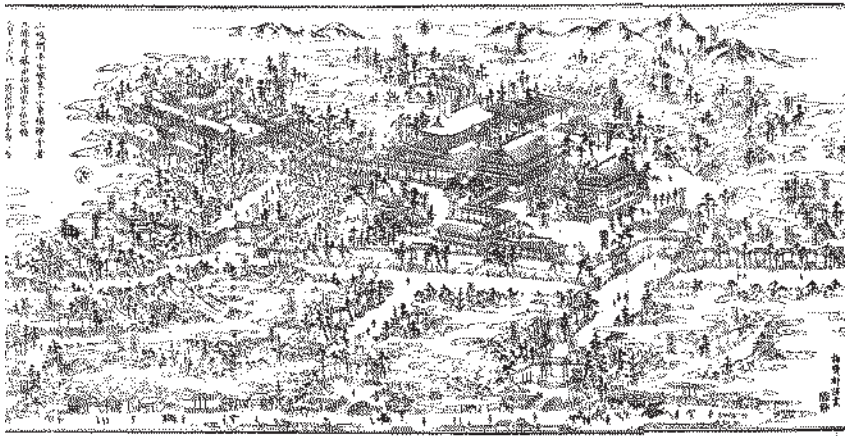


図3 東福寺の刊行境内図（部分）

※『池田遙邨氏旧蔵京都関係絵図類』，京都府立総合資料館所蔵。

次に、絵師に関する刻記をもつものの、絵師の生没年や活動時期など詳細が不明であるため、記載された境内地の景観年代から作画の時期を推定する場合を考えてみる。取り上げるのは、東福寺の刊行境内図（池田No.12）であり、図中の右下隅に「梅齋郁謹画」とあるが、管見の限りこの人物に関する詳細は不明である。

近世後期から近代初期の東福寺において、景観年代を推定するための手掛かりとなる一つの出来事は明治一四（一八八一）年一二月に発生した火災に伴う仏殿・法堂・方丈・庫裡の焼失である。現存する東福寺の本堂は焼失の後、大正六（一九一七）年から再建に着手し、昭和九（一九三四）年に落成した仏殿兼法堂である。図では「佛殿」と「法堂」が別々に描かれているため、景観年代が明治一四年を下ることはない（図3）。そこで、近世後期から明治一四年までの東福寺境内地の変化を『東福寺誌』³⁹から纏めてみた（表3）。これを見ると、明治元（一八六八）年一〇月に塔頭の東光寺の堂舎を長慶院に譲与し、同寺を曹溪院と合併して東光寺が廃止されているが、図中に東光寺が描かれていることから明治元年以前の境内地を描いていることがわかる。また、天保一四（一八四三）年に桂昌院が現在地に当たる南昌院跡地に移転しているが、図中に南昌院は描かれている。文政一一

表3 東福寺における境内主域の変化

年		月	境内の出来事
和暦	西暦		
寛政12	1800	—	願成寺が阿保町より現在地に移転。
文化4	1807	—	一華院創建。
文政2	1819	—	開山堂などで構成される常楽庵が焼失。
文政6 ～ 文政7	1823 ～ 1824	—	一条忠良によって開山堂・昭堂、塔司寮、庫裏が再建。
文政9	1826	—	常楽庵の全域が竣工。
文政11	1828	7	荘厳院が全焼。
天保14	1843	—	桂昌院が現在地（南昌院跡地）に移転。
明治元	1868	10	東光寺の堂宇を長慶院に譲与し、同寺を曹溪院と合併。東光寺は廃寺。
明治14	1881	12	仏殿・法堂・方丈・庫裡を焼失。

※白石虎月編（1979）『東福寺誌』，思文閣出版 より作成。

（一八二八）年七月には荘厳院が全焼しているのだが、こちらにも図中に確認されるため、本図の景観年代は文政一一年を遡らない。文政六（一八二三）年には一条忠良によって開山堂などからなる常楽庵が再建されており、これは四年前の文政二（一八一九）年に焼失したことによる。再建に当たり忠

良が常楽庵楼門の額を揮毫しており、図左端の刻記には「楼門 額 万年山左大臣忠良公御筆」とあるため図中の常楽庵は再建後とみられる。これらの点を総合して、東福寺の刊行境内図の景観年代は文政六年以降・文政一一年以前となり、常楽庵全域の竣工が文政九（一八二五）年であることを考慮するならば、さらに文政九年から文政一一年の間に絞ることができる。

（3）刊行境内図の構図と名所図会

刊行境内図で用いられた鳥瞰的あるいは俯瞰的な視点からの描写は、日本絵画のなかで長い歴史を有している。近世の京都で刊行された洛中洛外の絵図に限ってみても、一七世紀前半には寺社の鳥瞰的図像が地理的な位置関係を明示しないまま挿入され始め、一七世紀末になると京都近郊が有名寺社を含めて鳥瞰的に描かれるようになっていく。平面図の境内図が、堂舎・社殿の配置は正確に描くものの、地上に建つ建物の形態や植栽されている樹木などの視覚的景観を描写の対象としないのに対して、鳥瞰的（俯瞰的）視点から描かれた刊行境内図は境内地に建つ堂舎・社殿などの諸施設や樹木・燈籠などを立体的かつ絵画的に描いている。こうした視覚的景観を効果的に描き込むために、刊行境内図でも伝統的な順

勝手・逆勝手の構図が採用されている。

刊行境内図に描かれているものは、正確に言えば寺社の境内とその周辺地域である。図の主題はもちろん前者にあり、その意味で後者は付随的な情報と言えよう。しかし、後者は寺社境内の、あるいは境内からの地理的位置関係を示すものでもある。筆者が刊行境内図を地図（絵図）とみなすのは、境内における堂舎・社殿の配置（位置関係）の描写だけでなく、寺社と周辺地域との地理的關係が示されているためである。

寺社と周辺地域との地理的關係を示す上で重要な点は、寺社への参詣路と寺社境内への入口を明示することである。鳥瞰図では、利用者の視点は常に描写対象の斜め上空に想定されている。したがって、寺社への参詣路と寺社境内への入口は、順勝手・逆勝手に関わりなく、図の下辺に描かれることになる。また、順勝手の図では右下にできるスペースが小さく、基本的には近隣の近景が描かれるのに対して、境内の左側には大きなスペースができ、下から順に近景・中景・遠景の順で比較的多くの情報が掲載可能になる。逆勝手の図になると左下に小さなスペース、右側に大きなスペースができ、両方で情報量が異なる。境内を描く際に順勝手・逆勝手の選択がどのような理由から行われたのかは判然としないが、し

かし寺社と周辺地域との地理的關係を示す上では大きく取られたスペースに描かれるものが重要になる。先述の東福寺の刊行境内図の場合、境内中心部から左下に向かって参道が三本伸びており、参道と主要な街道である「伏見街道」の交差する点には「北門」「中門」「南門」が描かれ、図の左側に生じたスペースには縁起や境内の主な施設の情報が記されている。

さらに、考慮に入れておかなければならない点は、『都名所図会』⁽⁴⁰⁾を嚆矢とする名所図会類に掲載された図版との構造的な類似性である。清水寺の刊行境内図（池田No.23・慶應No.4）の構図と『都名所図会』の清水寺を見てみよう。両図の描写範囲は、どちらも仁王門前の泰産寺子安塔から奥之院や音羽滝付近までで、本堂と舞台のある境内中心部を南西上空から眺めたように描き、背後に音羽山、境内の北と南には雲を配置している点も共通している（図4）。同様の例は、天保三（一八三二）年に再刻された方広寺の刊行境内図（慶應No.17）でも確認され、本図の下半分に描かれる方広寺大仏殿と三十三間堂の描写は『都名所図会』の「大仏殿」「蓮華王院 三十三間堂」⁽⁴²⁾の図との類似性を認めることができる。『都名所図会』であるか否かは別として、これらの刊行境内図が盛んに刊行された背景にはそれらに先行し、参照された

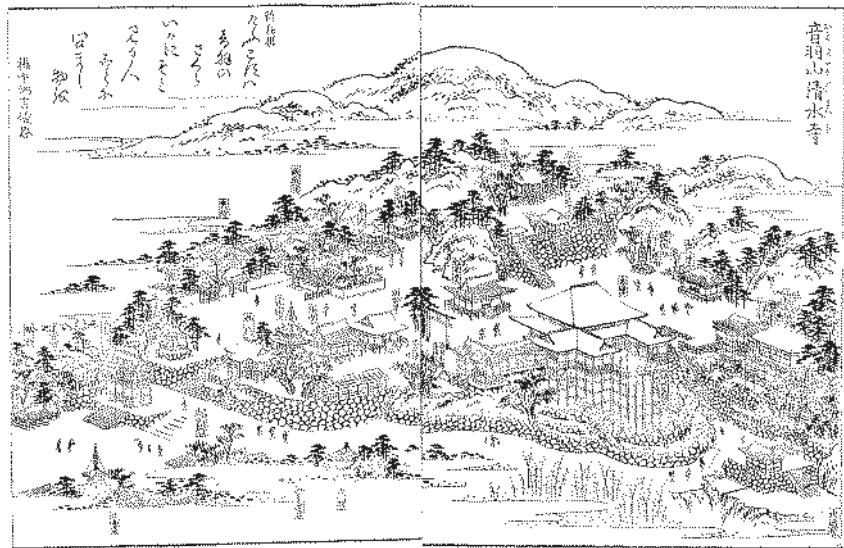


図4 清水寺の刊行境内図(上)と『都名所図会』の「音羽山清水寺」(下)
 ※上図…『江戸時代の寺社境内絵図』上 所収。
 下図…『都名所図会』(『新修京都叢書』6) 所収。

図が存在したことは十分に考えられることである。⁴³⁾

今回の検討で対象とした刊行境内図のなかで最も古い刊行年は、東本願寺の刊行境内図（慶應No.18）の寛政一〇（一七九八）年である。この刊行境内図は『都名所図会』の刊行された安永九（一七八〇）年より後年のものであるが、「再刻」とあるため、これ以前に同寺の境内図が刊行されていたことは確かである。この図で興味深いことは『都名所図会』の図版とは全く異なる描写になっている点である。東本願寺の刊行境内図について、現時点で確認できる最古の図は「宝暦十一年辛巳正月吉日 京ふや町せいかんし通下町 八文字屋八左衛門板元」の刻記をもつ「京都東六條 本願寺御大絵図新改正」である。⁴⁴⁾ 全体的に言えば東本願寺境内を鳥瞰的視点で逆勝手に描いているが、一部に正面方向で描く部分があり、鳥瞰図としては完成していない。また、「新改正」の記載は先行する境内図があったことを示唆しているとも考えられるが、管見の限り確認できていない。

この図で注目されることは、第一に宝暦一一（一七六一）年と『都名所図会』刊行以前の鳥瞰的（俯瞰的）な刊行境内図であること、第二に宝暦期は森幸安が活発に社境内地図を作成していた時期であり、森幸安による宝暦五（一七五五）年の「東本願寺之地図」⁴⁵⁾も逆勝手に、大門・本堂（御影

堂）・阿弥陀堂などを正面から描いていることなどの共通点が認められることである。森幸安の図が刊行境内図の原図であったとは直ちには言えないが、刊行境内図そのものは『都名所図会』の刊行以前からあったことは間違いない。一八世紀の刊行境内図は確認例が少ないため今後の検討を必要とするが、現時点では一八世紀中頃から刊行境内図の出版が始まり、『都名所図会』の刊行後に活況を呈するようになったと考えておきたい。

四・刊行境内図にみる社境内地

―北野天満宮を事例に

（一）北野天満宮の刊行境内図

本章では、前章までに検討してきた点を念頭に置き、近世後期に出版された北野天満宮の刊行境内図を用いて同社の境内地の状況を復原することで、個別の社境内地を研究する際の刊行境内図の資料性についてまとめてみたい。

北野天満宮の刊行境内図は、管見の限りではあるが四点確認される。

一点目は「北野天満宮御境内図」（慶應No.14）であり、絵師に関する刻記は「速水春暁斎遺図 森川保之補図」とある（図5・上）。速水は文政六（一八二三）年七月に没してお

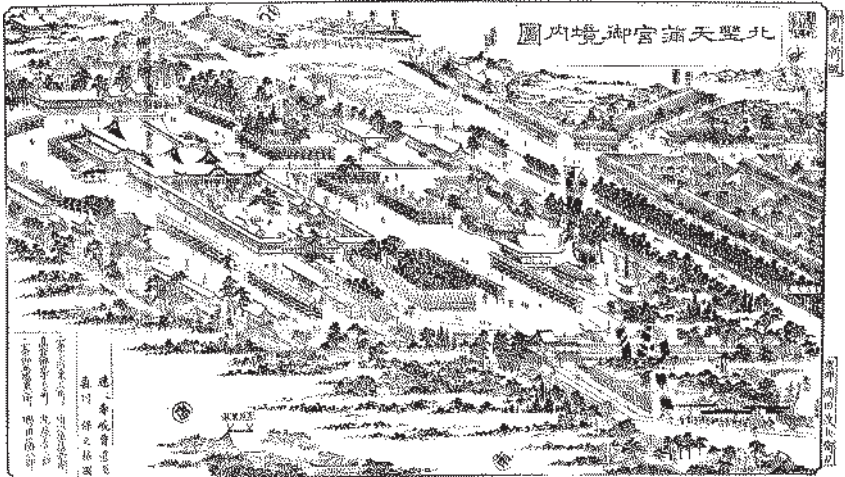
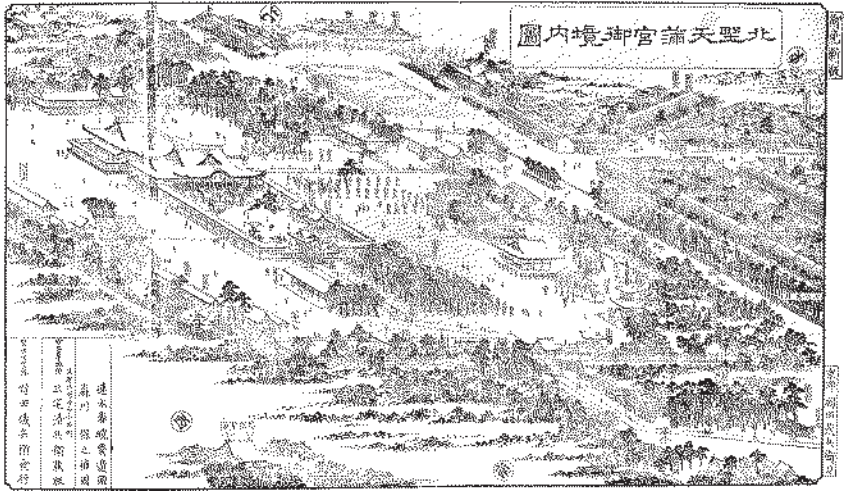


図5 「北野天満宮御境内図」

※上図…『江戸時代の寺社境内絵図』補遺編 所収，下図…個人蔵。

り、森川は文政期から天保期にかけて活動した京都の町絵師である。⁽⁴⁶⁾ 彼の刻記では彫師が「京師 岡田茂兵衛刀」とあり、「京都北野西今小路町 御墨筆硯所 三宅清兵衛藏版」「製本所書林 野田儀兵衛発行」と版元などの情報が記され、北野天満宮境内地の西小路町で墨・筆・硯を商う文玉堂・三宅清兵衛の所蔵する版木を用いて、野田儀兵衛の所から刊行したものであることがわかる。境内の景観を確認すると、「北野天満宮御境内図」には天保一〇（一八三九）年の「北野天満宮社頭図」⁽⁴⁷⁾に記される中門内の四座（白太夫社・火之御子社・福部社・老松社）の祠のうち白太夫社・火之御子社だけが描かれている。このことから、この図の景観年代は天保一〇年以前であると推定される。

二点目は一点目と同名の図⁽⁴⁸⁾で絵師は同じであるが、本図の版元は「二条小川東へ入町 近江屋孫兵衛」「高倉佛光寺上ル町 丸屋善三郎」「二条柳馬場東へ入町 野田藤八郎」の三名で、一点目とは異なっている（図5・下）。また、描かれた境内の様子が異なっている。本図では境内の本殿や拜殿の周囲などに燈明皿を載せる棚が描かれ、また参道には「萬」などと書かれた幟が描かれている。この燈明棚と幟の描写から、本図は嘉永五（一八五二）年に開催された菅原道真没後九五〇遠忌の万燈会の様子を描いたものとみられる。この法要に

関連して刊行された図が三点目の「北野天満宮御社之図」⁽⁴⁹⁾であり、二月朔日から二五日まで催された萬燈会の情報を載せている。絵師の刻記は「岡田春燈齋」とあり、岡田は京都の銅版画家で幕末期に各地の名所図を作成したことで知られる。なお、本図の描写は境内のみで、周辺地域の記載はない。

四点目は「北野天満宮御境内之図」⁽⁵⁰⁾であり、版元は「平安清水九文堂梓」と記される。描写範囲や社殿の向きなどの点で他の図と異なる点が多く見られ、前三者では中門の北側に白太夫社と並立して描かれていた火之御子社が白太夫社北隣ではなく、本殿西側にあつた朝日寺の北隣に描かれている。このことから、本図は前三者より景観年代が古いと推察される。

以上の北野天満宮に関する四点の刊行境内図を整理すると、景観年代が古く内容も異なる四点目を除いて、一・二点目は刊行の時期や内容は異なるものの図名・絵師・彫師について同一の刻記をもち、二・三点目は菅原道真の九五〇遠忌に係して刊行された図となる。一・二点目の「新版御免」の表記は、旧版の存在をうかがわせるものであり、この点を勘案するとまず速水春暁齋が作画を担当した「北野天満宮御境内図」が刊行され、三宅清兵衛が版木を所持し、次の段階として三宅の版木をもとに森川保之が加筆して版元の野田儀兵衛

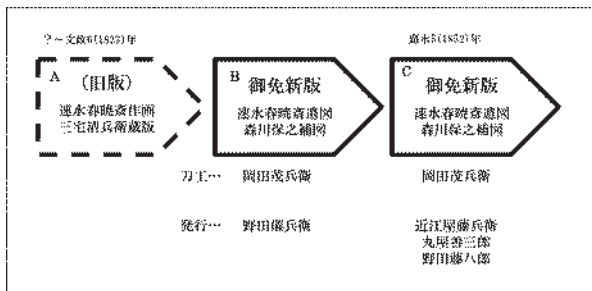


図6 「北野天満宮御境内図」の変遷

※ B・Cは、前版を改変したものだ。

同様の境内図が刊行されたと思われる。

が北野天満宮から「御免新版」の許可を受けて刊行した図が一点目であり、その後、嘉永五（一八五二）年の菅原道真九五〇遠忌の万燈会に際し、幟や燈明棚などの情報を追加した二点目が刊行されたと考えられる（図6）。なお、二・三点目はこの万燈会に関連して刊行された図であり、大規模な催事であったことからみれば、他にも

(2) 「北野天満宮御境内図」にみる境内地

図7は『都名所図会』掲載の「北野天満宮」図である（図7）。『都名所図会』の図では楼門内側の境内中心部を大きく描き、右下隅に影向松と願成就寺を配置した逆勝手の構図で

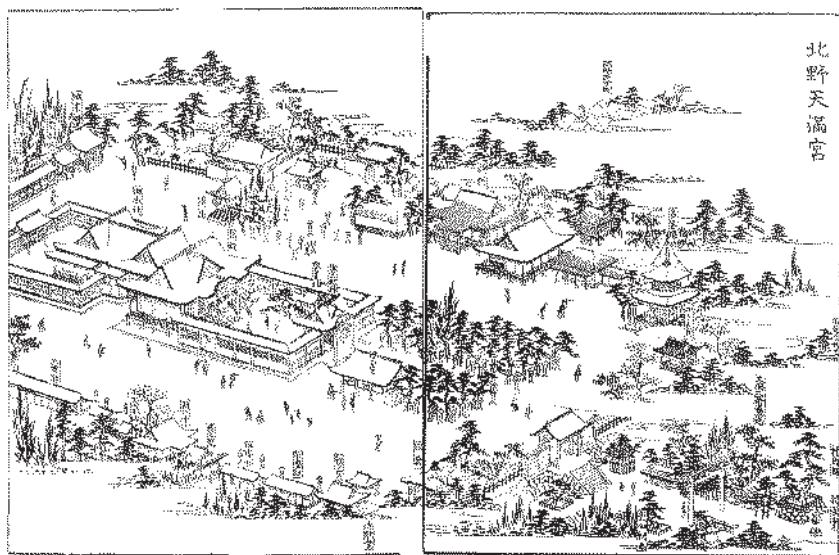


図7 『都名所図会』の「北野天満宮」図

※ 『都名所図会』（『新修京都叢書』6）所収。

ある。但し、図右上に生じたスペースには僅かに「内野遊女町」と注記した家屋群が屋根形で描かれているのみで、境内との間には雲を配置して距離感が失われている。また、作者の関心は境内の建物配置にあつたとみられ、参詣路をはじめとする周辺地域との地理的な接続関係を示すものは文字注記を含めて何一つ記載されていない。四種の北野天満宮の刊行境内図の中で最も古い「北野天満宮御境内之図」も境内に関心が払われ、南門と鳥居を図左下に、「御本社」と記す本殿を図右上に描く順勝手の構図である。境内の建物を詳細に描く一方、周辺地域は雲で覆つて全く描いていない。

これに対して、一点目の「北野天満宮御境内図」（以下、「御境内図」と表記）では本殿などの建つ境内中心部が中央左寄りに描かれ、右下方へ向けて参道が伸び、参詣者の起点となる影向松と願成就寺は右下隅に位置し、『都名所図会』の図と同じ逆勝手の構図で描かれている（前掲図5・上）。

また、境内中心部の右側に生じたスペースには周辺地域が配置されている。南北に長い敷地の境内は平行四辺形に描かれることで奥行が広く取られ、「御本社」や「拝殿」をはじめ多宝塔や鐘楼から摂社・末社、それに燈籠・樹木に至るまで絵画的かつ詳細に描かれている。楼門から鳥居を経て影向松へ続く参道の脇には「東向観音」や「経王堂」「山名氏清の

碑」と付された願成就寺が描かれている。⁵²⁾ これらの構図と建物の記載は二点目も同じである。

詳細な境内中心部の描写に対して、周辺地域の表現はやや簡略的なものとなっているが、そのなかでも場所によつて違いが見られる。詳細に描かれているのは境内東隣の右近馬場通であり、図右端から境内と平行に道路・並木・家屋群、東門北東に位置する「松梅院」などが詳細に描かれている。近世の北野天満宮は社僧が祭祀を務めており、別当職の曼殊院門跡を筆頭として、その下に祠官三家の松梅院・徳勝院・妙蔵院が世襲で祭祀を司り、なかでも松梅院は「神事奉行」職や公文職を務めていた。⁵³⁾

さらに家屋の表現は一般の町屋と社僧の居住する僧坊に分類できる。町屋は平入りの厨子二階で、一階部分の店を開け放ち、店先に床几を置くものが見られる。東門向かい側の町屋は、注記こそないもののその位置から「七軒茶屋」あるいは「上七軒」⁵⁴⁾ と呼ばれた茶屋と判断できる。これに対して、僧坊は入母屋造の松梅院は別として、平入りの平屋造で描かれている。その描き方にも二通りがあり、右近馬場と東門前で交わる五辻通・今出川通沿いの寺院は道路に面して門と塀が描かれ、建物は町屋より高く描かれ、松梅院以北や境内北側の寺院は屋根形のみが描かれ、前者に比べて表現は簡略化さ

れている。また、これらの僧坊は祠官三家のようにそれぞれの坊名が記されている。社僧の居住する僧坊が北野天満宮を参詣する人々に対して宿坊の役割を果たし、参詣時の世話から絵馬や燈籠の建立などに便宜を図っていたことから、北野天満宮の参詣者にとって境内の諸施設と同じく宿坊の位置・名称も必要性の高い情報であったことをうかがわせている。

ここで注目したいのが「御境内図」の描く範囲である。境内の北は「目代春林坊」と「玉林坊」までであり、雲を挟んでその左に描かれた「平野社」は、実際には境内北側の「上乘坊」から御土居と紙屋川を越えて西へ進んだ位置にあるため、近隣の名所として描き込まれたと推察される。南では図の右下隅に「経王堂」（願成就寺）が描かれるが、この地は概ね現在の北野天満宮交差点の北側に当たる。これに対して右下の「大將軍社」の社殿と鳥居は北野経王堂の西に位置するかのように描かれているが、大將軍社は実際には天満宮から南西へ約二〇〇mの地点に所在している。大將軍社も平野社と同じく北野天満宮の近隣の名所であり、実際の位置を歪めて図中に描き込まれたと思われる。

天満宮の東には、V字形の二本の道路とそれに沿って家形が描かれている。北側の道路が五辻通、南側が今出川通であり、いずれも東の西陣方面から北野天満宮東門へ至る参詣路

である。五辻通は今出川通との交差点角の「弁天」から「玉庭坊」など三寺が描かれるだけで、その先は省略され、今出川通は図右端の「金山天王寺」と「紅梅殿」までを描いている。図上では、東門から右近馬場通の南端までの距離と同程度に描かれているが、現在の地図上で計測すると実際はほぼ倍の距離、つまり東門から影向松の間とほぼ同等であり、実際の距離より縮めて描かれている。これは、名所として知られる金山天王寺と菅原道真に所縁のある紅梅殿を図中に描き込むための措置であり、『都名所図会』によれば前者は「洛陽観音巡の其一ヶ所」で本尊の如意輪観音は聖徳太子の作と伝わる。⁵⁶ 紅梅殿は菅原道真が愛した飛梅を祀る施設であり、『都名所図会』では金山天王寺の次に記載されている。なお、紅梅殿は文政年間（一八一八〜三〇）に境内中心部へ移転し、⁵⁷ 同時期に老松町の老松社も同様に移転したとされる。⁵⁸ 但し、移転後の嘉永五（一八五二）年に刊行された「御境内図」（前掲図5・下）は九五〇遠忌万燈会の幟や燈明棚を旧版に埋木をして修したものであるが、紅梅殿は旧地にそのまま描かれている。

(3) 刊行境内図に描かれる境内地

「御境内図」は、本殿などの建つ境内を大きく描き、その

周囲に近隣の寺院や町屋敷、それに紅梅殿などの関係地と平野社・大将軍社・金山天王寺といった周辺の名所を絵画的に描いていた。図中には境内の社殿や参詣者の世話をした宿坊、それに境内の内外にある名所旧跡の名称が詳細に記されており、これを用いた人々はその場所に関する知識が無くても刊行境内図に描かれた境内とその周辺を見ることで視角を通じて直感的にこれを理解して、参詣できたと推察される。刊行境内図の絵画的かつ詳細な表現は、北野天満宮が「境内」として支配した土地、すなわち境内地の管理などを目的として土地区画や建物の配置、屋敷の居住者名を記録した絵図には見られない点であり、実際に参詣者が利用した刊行境内図の特性を表している。

一方で、刊行境内図を通して認識される境内とは鳥居や門といった境界装置の内側に広がる空間であり、その「境内」と北野天満宮が支配する「境内」の範囲とは一致していない。享保初年の『京都御役所向大概覚書』⁽⁵⁹⁾では北野天満宮境内地と隣り合う西陣の範囲を「西ハ北野七本松を限り」と記し、天満宮が支配する境内地の東の境界が七本松通であったことがわかる。明治初年に作成された「北野社域図」⁽⁶⁰⁾を見ると、五辻通や今出川通などの七本松通を西に入った所に「従是西北野境内」と記されており、『京都御役所向大概覚書』の記

述と一致している。「御境内図」の東端に描かれた金山天王寺と紅梅殿は、「北野社域図」では金山天王寺が七本松通と今出川通の角に位置し、紅梅殿が金山天王寺の今出川通を挟んだ向かい側に描かれている。このことから「御境内図」の東端は北野天満宮境内地の東端と一致していることがわかる(図8)。



図8 「御境内図」の描写範囲と北野天満宮境内地の範囲
 ※平成15(2003)年修正1万分1地形図「太秦」に加筆。
 AからFの範囲が前者、①から⑥が后者の範囲。

北へ目を転じると、「北野社域図」の北端には「神明社」が描かれ、目代の春林坊までを描く「御境内図」とは一致しない。次に南端であるが、「北野社域図」では境内の南に続いて馬喰町の町屋敷と西雲寺などの寺院、そして下之森を描き、下之森と七本松通が接する位置にも「従是西 北野境内」と記される。これに対して、「御境内図」の南端は周辺の名所として描き込まれた大將軍社を除けば鳥居と影向松、それに願成就寺までしか描いておらず、馬喰町と下之森が全く捨象されている。これは、下之森の北に位置し、七本松通から願成就寺へ達する今小路通の町屋敷（末之口町・東今小路町・西今小路町）においても見られるものである。

このような刊行境内図に描かれる「境内」の範囲と実際に寺院・神社が「境内」として支配した土地、すなわち境内地の範囲の差異は、北野天満宮に限ったことではなく、他の神社の刊行境内図でも確認される。清水寺の刊行境内図では、本堂や舞台などで構成される境内を中心として仁王門前の泰産寺から奥之院までの範囲を描いているが、実際には清水寺の参詣路である清水坂・五条坂・産寧坂に展開する門前一丁目から四丁目などが境内地⁶¹に含まれ、その全体を描く絵図⁶²が確認される。また、鹿苑寺の刊行境内図は鹿苑寺舍利殿（金閣）や庭園を中心に背後にある衣笠山などを描いているが、

実際の境内地は大北山村の門前集落をはじめ紙屋川以北の向野や山間部の原之壇を含む広大なものであり、刊行境内図の描く範囲と実際に寺院が支配した境内地の範囲は一致しない。 「北野社域図」はその記載内容や伝来の経緯から北野天満宮が主体となつて作成した境内図とみられるが、その境内とは基本的には神社が自ら支配・管理する土地そのものである。これに対して、刊行境内図は参詣者に向けて刊行されたものであり、鳥居や門によって囲い込まれた境内とは信仰の場あるいは参詣対象となる空間である。作成・利用の主体、そして作成目的の違いがこうした異なる境内の認識を生み出したと言えよう。

五．おわりに

本稿では、近世の京都で出版された寺院・神社の刊行境内図の有する資料的特徴について検討し、その上で刊行境内図を通して読み取ることができる境内の景観を、北野天満宮境内地を事例に考察してきた。得られた知見は次の通りである。

- ① 刊行境内図を適切に位置づけた絵図の分類体系は、現時点では存在しない。

② 刊行境内図は構図の点で『都名所図会』と類似するが、一八世紀中期には既に刊行されていたことが確認できる。

③ 刊行境内図には境内が立体的かつ絵画的に描かれ、諸建築の様子や施設の名称、門前集落や近隣の名所旧跡などが記載され、寺社が作成した手書き境内図からは得られない情報を得ることができる。

④ 刊行境内図には、一般に理解されているように境内の実際の景観を視覚的に表現したもののだけでなく、失われた景観を図にとどめ、あるべき景観を伝えようとしたものがある。

⑤ 刊行境内図の刻記の分析を通して刊行境内図の出版時期や景観年代を考察することは可能である。しかし、刊行年の記された図は少なく、作画年あるいは景観年代を明らかにすることが重要である。

⑥ 北野天満宮をはじめ幾つかの寺社では、寺社側と参詣者側で境内の範囲について認識に差が生じていると考えられる。

上記のうち、①は刊行境内図の成立に関わる問題であり、一八世紀中期の刊行境内図が鳥瞰図として未完成であったことを考えると、描画法の変化も検討課題として挙がってきたと言えよう。また、②は寺社境内地を景観的に捉えようとしたとき、刊行境内図が有効であることを示しているが、③・④は資料としての利用の難しさを示している。さらに⑤は筆

者がこれまで取り組んできた寺院・神社の境内地処分と景観変化に関係する問題である。

次に、刊行境内図が出版されていた同時代の同種の資料である『都名所図会』をはじめとする名所図会類との比較・検討である。本稿では構図の共通性を指摘したが、刊行境内図はもとより名所図会の成立を考える上でもこの点は重要な課題である。

最後に、本稿は近世後期の京都で出版された刊行境内図のみを扱ったが、全国各地で刊行された刊行境内図には言及できなかった。また、京都府立総合資料館が所蔵する刊行境内図の中には近代に作成された図が確認されたように、近代にも刊行境内図が盛んに出版されていたが、それらの調査と近世から近代にかけての刊行境内図の変化にまで触れることができなかつた。以上の点を今後の課題として、稿を終える。

〔付記〕本稿の作成にあたり、史料の閲覧に際して京都府立総合資料館のお世話になりました。また、佛教大学歴史学部の渡邊秀一先生にはご指導とご助言を頂きました。記して御礼を申し上げます。

註

(一) 渡邊秀一・木村大輔・小林善仁・藤井暁(二〇〇七)「暁峨諸寺門前地の近代的変容に関する予備的考察」佛教大学ア

- ジア宗教文化情報研究所紀要三、一〇～五九頁。小林善仁(二〇一〇)、「山城国葛野郡天龍寺の境内地処分と関係資料」『鷹陵史学』三六、一〇～二三頁。同(二〇一二)、「近代初頭における天龍寺境内地の景観とその変化」『佛教学歴史学部論集』二、二三～四二頁。同(二〇一三)、「北野天満宮の境内図に関する資料的検討―「北野社域図」を事例に―」『鹿児島大学法文学部紀要人文科学論集』七七、一九～三六頁。同(二〇一三)、「近代初頭における京都近郊の景観―鹿苑寺境内地と大北山村を事例に―」(『佛教学総合研究所紀要別冊』『洛中周辺地域の歴史の変容に関する総合的研究』所収)、一六五～一九〇頁。
- (2) 白石克(一九八五)、「江戸時代の相州」『江之島絵図(刊行図)』、斯道文庫論集二二、二九七～三四九頁。
- (3) 白石克(一九九〇)、『慶應義塾図書館所蔵 江戸時代の寺社境内絵図(一枚刷)上関西』(文献シリーズNo.19)、慶應義塾大学三田情報センター。同(一九九一)、『慶應義塾図書館所蔵 江戸時代の寺社境内絵図(一枚刷)下東海・関東・東北・その他』(文献シリーズNo.20) 慶應義塾大学三田情報センター。同(一九九七)、『慶應義塾図書館所蔵 江戸時代の寺社境内絵図(一枚刷)補遺編』(文献シリーズNo.25)、慶應義塾大学三田情報センター。
- (4) 師橋辰夫は『古地図研究』のなかで付録の刊行境内図に解説を付している。
- (5) 禊氏祐祥編(一九四二)『京都社寺境内版画集』、便利堂。
- (6) 矢守一彦(一九八四)『古地図と風景』、筑摩書房、五九頁。
- (7) 前掲(3)、『慶應義塾図書館所蔵 江戸時代の寺社境内絵図(一枚刷)上関西』、一頁。
- (8) 前掲(3)。
- (9) 『池田遙邨氏旧蔵京都関係絵図類』、京都府立総合資料館所蔵。
- (10) 景山春樹(一九六八)「古絵図概説」(『古絵図 特別展覧会図録』所収、京都国立博物館、解説一〇～一三頁。
- (11) 前掲(10)、四頁。
- (12) 下坂守(一九八五)「社寺絵図の分類」(特別陳列図録『社寺絵図とその文書』所収、京都国立博物館、三五～三六頁。
- (13) 山下和正(一九九八)「地図で読む江戸時代」、柏書房、二四～二五頁。
- (14) 前掲(13)、二四一～二六一頁。
- (15) 酒井一光(一九九八)「境内図の研究・展覧史」(特別陳列図録『描かれた聖域と名所―寺社境内図の世界』所収)、大坂市立博物館、三〇～三二頁。
- (16) 前掲(3)。
- (17) 白石克(一九八一)『慶應義塾図書館所蔵 寺社略縁起類解題』(文献シリーズNo.14)、慶應義塾大学三田情報センター。
- (18) 前掲(3)。本書では刊行年に関する記載をもたない絵図についても、江戸後期・江戸末期とおよその年代を記している。
- (19) 前掲(9)。
- (20) 宇野健一編(二〇〇八)『池田遙邨展 没後20年』、海の見える杜美術館。
- (21) 前掲(1)。
- (22) 池田No.14・15は同名で記載内容も同一の絵図であるが、No.14に比してNo.15の方は左端部が欠損している。
- (23) 池田No.22も京都府船井郡に所在するため対象範囲外の寺社境内地となるが、近代の刊記をもつ六点に含まれるため数に

は入れていない。

- (24) 以下、絵師に関する記述は次の文献に基づく。上田正昭他
監修(二〇〇一)『日本人名大事典』、講談社。
- (25) 吉田俊山編『皇都書画人名録』、順祥堂、弘化四(一八四七)年。
- (26) 『城州嵯峨五臺山清涼寺境内明細絵図』、個人蔵。
- (27) 梅川東拳はこの他に、安政三(一八五六)年に刊行された「賀茂川浚土砂運送略図」や「平安京御繪圖・并二名所ひとり案内」(近世後期)の絵などを担当している。
- (28) 『都百景』、文久三(一八六三)年から慶応元(一八六五)年頃。なお、『都百景』については次の論文を参考にした。大塚活美(二〇一一)『描かれた幕末の京都―『都百景』の制作と構成について―』アート・リサーチ/紀要vol.11、三七〜五一頁。
- (29) 弄翰子編『平安人物志』、博昌堂・芸香堂、文政一三(一八三〇)年版。
- (30) 『北埜紅梅むめ干』、文玉堂、年未詳。
- (31) 前掲(17)、三頁。
- (32) 瑞錦堂は、天保一五(一八四四)年に『花譜』(早稲田大学図書館所蔵)を刊行しており、書中に「三条通寺町」と所在地を記している。
- (33) 京都市編(一九八七)『史料 京都の歴史』一〇・東山区、平凡社、四二〇頁。
- (34) 雷火で焼失し、実際には存在しない方広寺大仏殿を描く姿勢は、文化五(一八〇八)年刊行の『華洛一覽図』(黄華山画)にも認められる。
- (35) 戴内彦瑞編(一九三七)『知恩院史』、知恩院、一〇九二頁。
- (36) 正宗敦夫編(一九六八)『地下家伝 上』、自治日報社、三七九頁。本書では嘉永三(一八五〇)年六月の任官を「正六位下式部大掾」としているが、式部省で大掾は誤りであろう。
- (37) 前掲(35)、五一二〜五一五頁。
- (38) 本図の右端には五重塔が描かれている。しかし、近世の知恩院に五重塔は存在せず、この描写は冷泉為恭による創作と思われる。
- (39) 白石虎月編(一九七九)『東福寺誌』、思文閣出版。
- (40) 『都名所図会』(野間光辰編(一九六七)『新修京都叢書』六所収)、臨川書店。
- (41) 前掲(40)、二三〇・二三二頁。
- (42) 前掲(40)、二二二〜二二五頁。
- (43) このような関係は浮世絵でも事例が指摘されており、歌川広重の『東海道五十三次』のうち石部宿など京都に近い宿場などの絵は、『東海道名所図会』を種本にして描いたといわれている。この点は次の文献で指摘されている。鈴木重三(一九七〇)『廣重』、日本経済新聞社、三四〜三五頁。大久保純一(一九八六)『広重風景版画における種本利用の諸相について』名古屋大学文学部研究論集 哲学三二、一〇五〜一二一頁。なお、大久保は近世後期の江戸で歌川広重などが作画し、刊行された社寺風景画と『江戸名所図会』との関係についても考察している。大久保純一『絵図のような社寺名所錦絵』(国立歴史民俗博物館(二〇〇一)『なにがわかるか、社寺境内図』、歴史民俗博物館振興会、一二〇〜一二二頁所収)。
- (44) 渡邊秀一『京都東西本願寺門前町の形成過程と変容―近世寺内町から近代門前町へ』(河村能夫編著(二〇〇七)『京都

- の門前町と地域自立』龍谷大学社会科学研究所叢書七六所収、晃洋書房、二二～五七頁。
- (45) 森幸安「東本願寺之地図」、宝暦五（一七五五）年、国立公文書館所蔵。本稿では国立公文書館デジタルアーカイブの画像を閲覧した。
- (46) 前掲(3)補遺編、解説1頁。なお、天保三（一八三二）年に京都の平野屋茂兵衛・著屋宗八が刊行した『大日本年中行事大全』では、速水春暁斎の遺稿に森川保之が挿絵を描いている。
- (47) 「北野天満宮社頭図」（前掲43）、『なにがわかるか、社寺境内図』、五九頁所収、天保一〇（一八三九）年、北野天満宮所蔵。
- (48) 「北野天満宮御境内図」、個人蔵。
- (49) 「北野天満宮御社之図」、立命館大学アート・リサーチセンター所蔵。本図は、同所の公開するデジタルアーカイブの画像にて閲覧した。
- (50) 「北野天満宮御境内之図」、筆者蔵。
- (51) 前掲(40)、七〇八・七〇九頁。
- (52) 足利義満は明德二（一三九一）年の明德の乱（山名氏清の乱）での戦没者を追悼するため、応永八（一四〇二）年に北野天満宮の社前に願成就寺（北野経王堂）を建立した。
- (53) 北野神社社務所編（一九〇九）『北野誌』首巻、國學院大學出版部。
- (54) 現在、上七軒は北野天満宮東側の花街の名称として知られるが、当初は「七軒茶屋」と呼ばれ、近世後期には「上七軒」の語が見られる。
- (55) 今出川通は、戦後に七本松通との交差点から南へ斜行する街路に改変され、昭和三一（一九五六）年に現在の今出川通が開通した。なお、旧今出川通は上七軒通と呼ばれている。
- (56) 前掲(40)、七〇三頁。なお、金山天王寺は廬山寺兼帯の寺院であり、明治六（一八七三）年には廃寺となり、翌年に本尊などは廬山寺へ合併された。合併の際、本尊の如意輪観音は廬山寺太子堂に安置されたため、現在の「洛陽三十三ヶ所巡礼」では廬山寺が第三二番札所で、第三一番札所の東向観音寺と第三三番札所の清和院とは順路になっていない。
- (57) 碓井小三郎編（一九六八）『京都坊目誌』上京区第五学区之部（野間光辰編『新修京都叢書』一八所収）、臨川書店、一四一頁。
- (58) 前掲(57)、一三八頁。
- (59) 「洛中町数并京境・西陣・西京之事」（岩生成一監修（一九七三）『京都御役所向大概覚書』清文堂史料叢書五所収）、清文堂、二二二～二二三頁。
- (60) 「北野社域図」、筑波大学附属図書館所蔵『北野神社文書』、明治初年。本図の閲覧は、同館が公開している電子化資料のうち『北野神社関係資料』の高精細画像にて行った。
- (61) 清水寺史編纂委員会（一九九七）『清水寺史』第二巻通史（下）、音羽山清水寺、四六三頁。天保四（一八三三）年の『高附帳』には、清水寺領一三三石のうち「清水境内」として一〇石七斗六升と記録されている。
- (62) 「寺領惣領絵図」、天保六（一八三五）年（清水寺史編纂委員会（二〇一一）『清水寺史』図録編一二四・一二五頁所収）、清水寺所蔵。
- (63) 前掲(1)のうち、鹿苑寺境内地論文。
- (64) 前掲(1)のうち、北野天満宮境内地論文。